

「当たり前」を思う

岡山県立津山商業高等学校

校長 石 下 義 久

今年度は多くの「当たり前」を失ってきた。言うまでもなく新型コロナウイルス感染症の拡大による様々な行事の中止や変更である。「修学旅行」「音楽祭」は中止、「自彊祭」「津商モール」「卒業式」「入学式」は変更、その他影響を受けた行事は数えればきりが無い。春には緊急事態宣言による臨時休業により、学校から生徒の姿が消えた。そして、それに伴う授業確保のため夏休みが短くなった。ずっと以前から当たり前に行われてきた学校の活動が一瞬にして消え去った。「当たり前」が「当たり前」でなくなった瞬間を私たちは見てきた。いや、情勢を見極め、主体的に判断し、それらを決定してきた。

第一学期始業式には、式辞で生徒に次のように伝えている。

「臨時休業になって一か月以上がたちましたが、みなさんは、この期間をどのように過ごしてきたでしょうか。本当であれば授業を受けたり、部活動に汗を流したり、クラスのみなどと他愛もない会話で盛り上がりたりしていたことでしょうか。しかし、今回の新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、それらの光景はあつという間になくなってしまいました。卒業式も卒業生と保護者・教職員だけという異例の式となりました。「この不安が去ったあと晴れやかな気持ちで在校生と会って下さい」と卒業生には伝えていきます。みなさんがいない学校は味気ないものでした。当たり前前の光景が、いかに大切なもののかを思い知らされた時間でもありました。みなさんも「友だち」、「授

業」、「部活動」、そして「学校」、これらが本当に本当に大切なものだどわかったと思います。令和二年度のスタートにあたり、これからも、当たり前前のことを、つまり、友だちや学校での様々な活動を大切にしたいと思えます。そして、それらが大切にできた時、感謝の心が生まれ、成長につながっていくのだと思いますし、自分や周りの人の、より良い将来を形作っていくことにつながるのだと思えます。」

そして、第二学期始業式には、生徒に次のように伝えている。  
「振り返ってみると我々は多くのものを失ってきました。音楽祭、美作総体、県総体、インターハイ……。感染症の状況を考えるとこれからの二学期も厳しい決断をしていくことになると思います。しかし、もつとも大切な「仲間」や「支えてくれる人たち」を失ったわけではありません。その人たちと共にこれからも私たちは力強く歩んで行きたいと思えます。」

さらにこのことを深く考えると、部活動の発表の機会や音楽祭などの活動や行事の本質は「学び」であり、大切な「成長」の機会であつたということがわかります。しかし、「学び」や「成長」の機会とは別の場面に置き換えることもできるはずですが、また、失つたものに対する「苦しみ」や「我慢」は絶対に皆さん自身の成長へもつながっているはずですが、厳しさは皆さんを育ててくれるものだと思います。成長した心で工夫しましょう。あらゆる場面でこういう場合はどうするか「自分でしっかりと考え、判断し、行動することが大切」です。その時「どういう人間になりたいか」が判断の拠り所です。これからも感染症対策、そして熱中症対策を徹底しながら、前に進んで行きましょう。」

生徒には明るく呼びかけたが、失った学びの機会における損失を考えると暗澹たる気持ちになる。特に価値観や自己認識、行動特性などを決定し、キャリアにもつながる高校生段階での非認知能力（自制心・忍耐力、意欲・向上心、協調性・社交性、コミュニケーション能力など）の育成や、「合意形成」を図り、仲間づくりを進めるためのしかけづくりといった大切な機会が奪われたのである。それらは、普段の学習や検定取得などに必要な認知能力にも良い影響を与えていたはずだ。しかし、今まで商業の学びにおいては当たり前のよう大切にしてきたものたちが、機能しにくくなった。それでも工夫しながら前に進んでいったけれども、やはり完全ではないように思う。特に「為すことによつて学ぶ」という特別活動においては厳しいものがあつた。人間は社会的な動物であるため、本来、「他者とのかわりの中で生きていく」というある程度の前提がある。新型コロナウイルスはその前提を窮屈にしまった。

しかし、悪いことばかりではないように思う。「当たり前」の大切さを再認識できたし、その奥底の隠れている本当の意味を深く考えるきっかけにもなった。「なぜ、その行事が必要なのか」「実行することが目的化していないか」「他で代替できるものはないか」「効率的な学びはできないか」など、常に考えさせられる一年であつた。また、ICT教育の大幅な進展は、我々に教える手段を増やしてくれた。それらの思考や技術を駆使しながら、Withコロナの時代には正解のない答えを探し、皆で「合意形成」しながら、更新し続けることが「当たり前」になるのではないか。

自彊祭への保護者の観覧について、密になるため制限すべき

かどうか悩んでいた時に、生徒会長が私に言った言葉が忘れられない。「こういう状況ですから無観客は仕方がないと思います。私たちが皆を説得します。ただ、大切にしてきた応援合戦は工夫しますのでやらせてください。」生徒の成長に驚き、安心した。悩んでいたことが嘘のように思え、気分も晴れていった。実はこういう生徒を育てたいのだと再認識した。「当たり前」が「当たり前」でなくなつた時に気づいたことは、私たちの答えは目の前に存在しているということだった。

コロナ禍の中、窮屈で大変ではあるが、本校で育つた生徒が未来を見据え、お互いを認め合い、少しでも相手の立場になつて考えることができれば、厳しい問題も解決に向かうはずだ。自分らしく、地域や社会の発展のために生き生きと躍動し、仲間とつながり、協働し、学んだことを自分たちの力で言葉や文章にして、「文化」として伝え、さらにその先の未来へつなげて行く。「自分や周りの人を幸せにする」「商業人として「当たり前」の「生き方」で切り拓いた未来は、明るいと確信している。

令和三年三月一日 発行 校誌「自彊」より